

- て』『古代学研究』90 1979
- (9) (財)広島県埋蔵文化財調査センター
『石鎚権現遺跡群発掘調査報告』
1981
- (10) 掛迫古墳調査団「備後掛迫古墳」『芸備
文化』第5・6合併号 1956

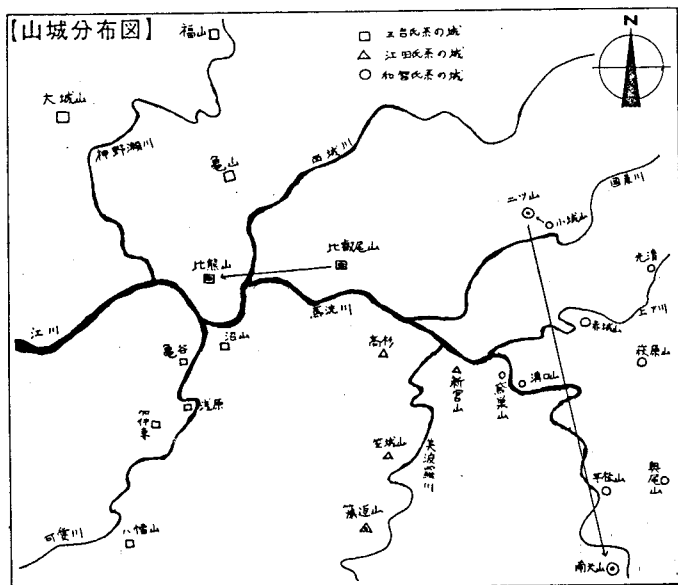
(11) 広島県教育委員会『亀山遺跡- 第2次発
掘調査概報-』 1983

(福山市木之庄町40番地の3)

県北の山城

“戦争のための山城”

新 租 隆 太 郎



にかけて三吉氏関係の山城、三次市塩町から南の三若町にかけて江田氏の山城、双三郡吉舎町を中心に三次市和知町にかけて和智氏関係の山城と、地域的に大別することができる。

この分布状態は地理的にみると、三次盆地に集中する江の川のいくつかの支流に沿っている。また、山城の占地、構造はその山城の築かれた時代によって相違する。

【鎌倉時代】

鎌倉幕府の成立により、源氏政権は全国に守護・地頭の配置を行なう。その任にあたる武士は代々源氏方の家来として従っ

県北には数百の山城址がある。三次市、双三郡内でもおそらく百箇所は下らないであろう。それらは全て鎌倉時代から戦国時代にかけて築かれたものである。中には中国縦貫道等の工事によって消滅したものもある。築城の年代も城主の名前も伝わらない山城も数多くある。

その分布状態は、中世期の三次地方における三吉氏・江田氏・和智氏の勢力範囲を考えるひとつの手がかりになる。三次市の中心部から西

たもの、源平合戦での戦功で恩賞にあずかったもの、いわゆる関東御家人と呼ばれる武士である。その中でも西国には有力な御家人が選ばれた。それは西国が平家一門の本拠地であったであろう。

その一人、三次郡の地頭職として移住してくる佐々木氏は、その出自を明らかにしないが現在の畠敷町に本拠を構えた。今では何の遺構も伝わっていないが、「殿敷」の古地名を伝える

総合卸センターあたりに居館を構え、背後の比叡尾山に山城を築いた。

また、三谿郡に入ってくる広沢氏は武蔵国に本領地をもち、「吾妻鏡」にも再三登場する源家の有力な武将で、後に和智氏・江田氏に分流するが、最初は和知町に「土居」の古地名がある保育所あたりに居館を構えた。そこは『水田耕地との比高差のあまり大きくない平坦面に設けられた。そこに土（農耕）と直結した初期武士団の姿がある』といわれるように、今では、そこは国道183号線により分断されてはいるが、周囲の水田面より3～4m高い立地で、居館を構えるには最良の地形である。そして、その「土居」より北東の小高い尾根上に「小城山城」を築城する。

和智氏が最初に築いた小城山城について文献資料にはみられないが、その占地・囲郭によって、鎌倉時代の形態である事がわかる貴重な山城であった。残念ながらつい最近中国縦貫道により消滅したが、事前の発掘調査により当時の築城技術がある程度解明された。それは南北15～55m、東西約75mで、西に続く尾根には土塁と堀切りで断絶し、東端にも堀切りを設け、北側は切り立った急斜面であった。

郭内には古墳が残っていたように削平された郭ではなく、明らかに、戦国期に築かれた山城と比較すると整然としない囲郭型式である。その時代はそれほど一族郎党も多くなく、戦闘も集団的な戦法ではない。従って本格的な山城も必要なく、ただ自然の要害地に土塁・堀切りを設けた程度で事足りたのであろう。勿論、石垣は築かず、堀切りもそれほど深くはない。郭内の建物も、発掘調査では確認できなかった。「殿敷」「土居」で営まれた日常生活の場である居館の様子については、あくまでも想像するにすぎないが、有名な「法然上人行状絵図」に描かれた備中国の源時国の館には綱代（竹を編んだもの）の扉に囲まれた母屋・馬屋・台所などが見られ、襖障子には大和絵が描かれている。おそらく当時の地方武士の館としては一般的な様子であろう。

和智氏の地方領主としての生活を伝える史料

に「とわずがたり」とよばれる有名な紀行文の中に、それをみることができる。

『あるし（主）かありさま（有様）をみれば、日ごとに、おとこ、女を、4～5人く（具）しもてきて、うちさいなむありさま、めもあてられず、こはいかにとおもふ程に、鷹狩とかやとて、鳥ともおほくころしあつむ、かり（狩）とてしもてくるめり、おほかた、悪業しんちう（深重）なるふし……』

とあり、「土居」での関東武士らしき生活が窺われる。

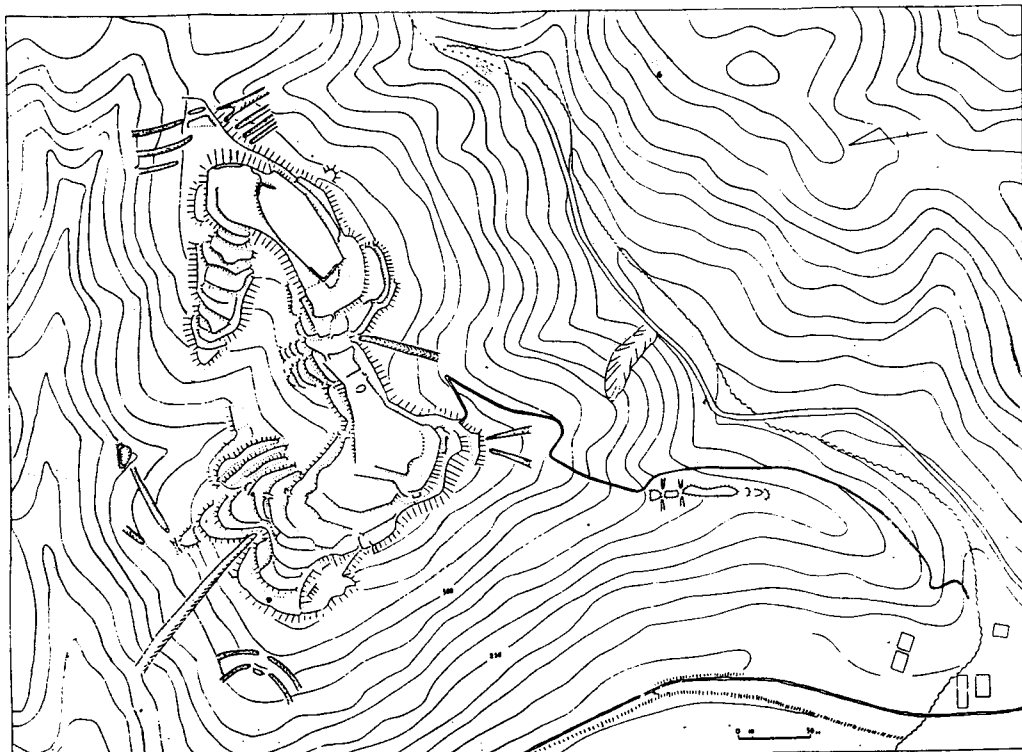
【南北朝】

南北朝の争乱の時代になると、中央政権の乱れは地方にもおよび、地方領主にも日常の問題として戦闘が、生活・施設に影響をおよぼしてくる。それまでは小規模な山城で目的を達していたが、それでは不安となり、より大規模で複雑な山城の築城が必要となる。そこで居館の背後の山地に、大規模で永久的な山城を築く。占地的には男山と呼ばれる独立した山を利用している。

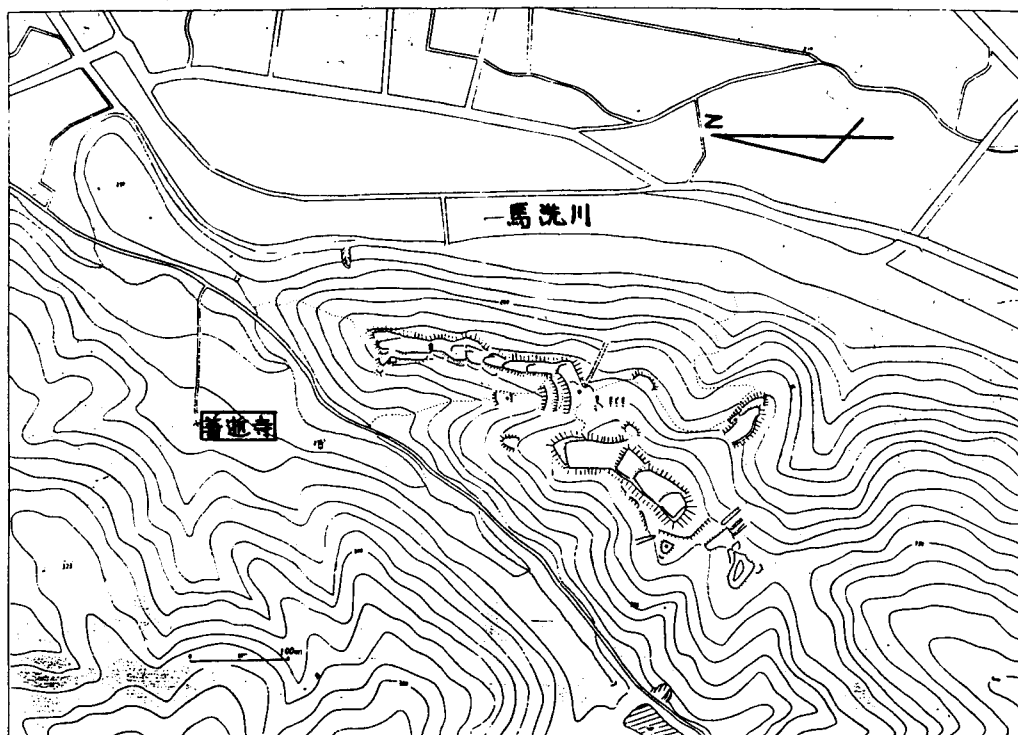
三吉氏は比叡尾山城をより充実し、郭の数も多くし、和智氏は新たに小城山城の北方の、標高382mの二ツ山に築城する。しかし、あくまでも日常生活は居館で営まれており、いざ合戦となった時に山城に逃げ込むので、城内の施設は充分でなかった。また、この時代になると、領内の要所要所に支城を築いて一族を配置し、本城と支城を結ぶ防禦体制の強化をはかった。

三吉氏は高田郡甲田の宍戸氏と境を接する可愛川沿いに八幡山城、加井妻城、浅原城、亀谷城、沼城を築いている。和智氏も一族を三良坂・安田に配置し、赤城山城（三良坂町田利）、奥尾山城（吉舎町安田）を築き、和智氏より別れる江田氏は、三次市三若町に旗返山城を築き居城とする。

和智氏の山城の中でも吉舎町三玉にある平松山城は、築城年代が明確であり、この時期の山城の構造を知る上で貴重である。貞年4年（1365）に築かれたこの平松山城は、今は松の茂る深山であるが、所領をめぐって足利幕府と



○ 平松山城跡（双三郡吉舎町三玉）



○ 南天山城跡（双三郡吉舎町吉舎）

一地方領主である和智氏が訴論を繰返した山城である。いかに武士が土地に執着していたか、その執念を物語る山城でもある。

和智氏は後に居城を二ツ山城より吉舎に移し、新たに南天山山城を築く。14世紀の中頃である。『いざいざ戻ろう、今日の日を見よやれ(中略)編笠は茶屋に忘れた、扇子は町で落いた、買うてまいせう、こんどの三吉町で』

これは山県郡新庄地方に伝わる「田植草紙」の一節である。これには、この頃から始まった三吉の定期市の事をうたっている。比叡尾山城下にも家臣の屋敷、商人の家々がたち、城下町の賑いが偲ばれる。今も畠敷町には四日市、五日市の市地名が伝わる。

和智氏の居城南天山山城の麓にも、四日市、七日市の市地名がみられ、城下町としての機能が充分うかがえるのである。また菩提寺の建立にも力を入れ、善逝寺・大慈寺という寺院の発達も、当時の文化を知る上で貴重である。

大永3年(1523)、石見国出羽の城主高橋大九郎久光は3千騎の軍勢を率いて青屋の城へ押し寄せた。陰徳太平記には『……当城は備後の三吉修理亮と数年争論の地なれば……同24日、高橋3千騎にて城の三方より攻めかかり……』とあり、一度は高橋氏の猛攻に青屋城は落城するが、同氏の油断により久光は三吉氏の雑兵によって討取られ、高橋勢は総くずれとなる。

出羽城に逃げ帰った同氏の残兵は甲合戦をすべく、毛利元就に援軍を依頼し、4月15日、毛利・高橋氏の両軍は3千5百騎にて再び青屋城に向かい陣をはる。それから4～5日間、毛利勢の攻城に城主青屋出羽入道友梅を中心に、1千人の軍兵は籠城に耐え必死の抵抗をする。城中には水も乏しかったが、敵の目をあざむくため白米を用いて馬を洗うしぐさをしたが叶わず、遂に落城する。三次市粟屋町上村にある加井妻城が、軍記の伝える青屋の城である。その青屋の城も中国縦貫道により、一部を残して再び「現代の軍勢」の前に落城する。

【戦国時代】

戦国争乱に入り三吉氏・江田氏・和智氏は、

より大きな勢力の前に不安定な日々が続く。

土地・財産・生命を守るために所領の隅々に支城を築く。県北の山城の9割以上にあたる山城の中で、河川に突き出した半島状の山地に築かれた小規模な山城は、この戦国争乱の時期に築かれている。背後に続く尾根を数条の堀切りで断絶し、土塁を築き、2～3段の郭を段階的に構築する型式の多いのが、戦国期の山城の特色である。三次市和知町で発掘調査された陣伝山城、天上山城もそうした戦国期に築かれた山城であった。

尼子氏の南下により大内・毛利氏との抗争が続き、その接点となった県北では、自分の意識に関係なく争乱にまきこまれた。恒常的となる戦鬪に対するため、居城の整備・拡張に力を入れる。

比叡尾山城の頂上部には、石垣構築の残る郭・穴蔵をもつ郭を含めて30以上の郭を確認することができる。この時期になると築城技術も格段の進歩をとげる。単に山を削平するのではなく、盛土による郭の構築、石垣の構築、斜面を走る数条のたて堀、高い土塁、中には全ての郭の断面に、石垣を築いている山城もある。

しかし、尼子氏の勢力に対するには、各領主の力は弱少であった。最初は尼子方に属していた三吉・和智・江田氏であったが、毛利氏の成長によりだんだんと毛利方にかたむく。それを良しとせぬ尼子氏は再三の攻撃をかけ、そのたびに尼子氏に降下するのである。まさに去就の定まらない日々であったろう。

そうした状態では居館での生活は不安となり、居城に家族ともども移り住む。従って城内には家族の住む郭、馬を入れる郭、食糧を貯蔵する郭、水を貯める郭が必要となる。戦国期の城は戦鬪の城であり、生活の城でもあった。

三次市高杉町にある祝城は、そうした山城とは全くタイプの違う城である。城址のある一帯は周辺の水田より4～5mほど高い丘陵地で、今は畑・宅地となり、知波夜比古神社(二宮さん)の裏の土塁・堀を除いては、城の面影は全くない。そこは、また古代人の住居の場でもあった。

この城は、美波羅川沿いを支配する江田氏の支城で、肥沃な高杉平野は同氏の経営にとって非常に重要であった。その為に、古くから土地の人々の崇拝をうける知波夜比古神社の神職である祝氏を城主に任じ、その土地に城を築き「武力と神力」による支配を続けていた。



三次市三若町にある江田氏の居城、旗返山城社。
天文22年、毛利元就によって落城。

尼子方に属していた江田氏は、毛利氏の備後経略にとって、この上ない眼の上のコブで、天文22年(1553)、毛利元就は近隣の国衆を動員して、その勢4千騎にて江田氏の攻略を開始する。その時、江田氏の同族である和智氏も、吉舎山中より江田領内に攻めこんでいる。

元就はまず祝城を攻むべく取囲み、1日にして落城する。その時の様子を陰徳太平記は『元就、江田が端城、祝の城へ押し寄せ、隙を作つて攻めたり……城中には祝甲斐守、同治部少輔を先として、宗徒の兵2百騎、並に久代修理亮が加勢百騎、其外雑兵等750人楯籠りければ、矢間を開いて散々に射る、寄手三重の惶を越え、一度に嚏と堀へ付く所を、城中の兵共、鎗・長刀を以て切落し突落しける間……』とみえる。

この合戦で毛利方の討取った首は六百余級で、城中のほとんどが討死している。二宮社の裏の堀からは、その時に討取られた武将の鎧の一部がみつかっている。

【戦国時代の終り】

尼子と毛利の抗争は毛利方の勝利に終わり、長かった戦乱にも一応の終止符がうたれる。攻めてくる敵もなく、苛酷な軍役もやわらぎ、

各領内は戦乱で荒れ果てた城下の整備に、毎日活気にあふれた槌の響く日々であった。

より城下の発展を考えた三吉氏は、畠敷の郷より巴の流れが集まる今の三次の町を新しい城下と定め、比熊の山に居城の築城、当時の都市計画である町割りにと、精力的に取り組む。

胡社を中心とした道路の整備、近在近郷から寺社の移築も盛んに行われた。また、河川を利用した交通にも力を入れたであろう。

和智氏も南天山城下の拡張のために、新たに市をおこし、三良坂の九日市を含めて所領の復活に取り組んだ。また、南天山城の建物の改築には瓦を使用し、かなりな建物があった事が想像できる。

毛利氏時代も、関ヶ原の合戦で毛利方が破れ終わり、同時に県北の諸領主も鎌倉時代より受継いだ所領を離れ、ある一族は一家離散、ある一族は毛利氏について長門に移った。当然、各城も廃城となり、雑木の茂りに覆われた。つまり、江戸幕府の始まりが、県北の山城に終わりを告げる「時の流れ」であった。

三次地方史研究会事務局長

(双三郡三良坂町)